

くらしとビジネスを、もっと快適に

アイリスオーヤマ株式会社

【角田 I.T.P : 宮城県角田市】

新型コロナウイルス感染症による影響のため、小売店や通信販売でマスクを探し回った経験はありませんか。今回は、国内外合わせて約 30 のグループでプラスチック製品を始め、様々な生活用品、ビジネス用品等を製造・販売するアイリスオーヤマ株式会社を訪問し、コンビニ等色々なお店で見かけるようになったアイリスオーヤマ製のマスクについて、国内で製造するまでの道のりなどのお話を伺いました。

売上の 6 割が新商品

アイリスオーヤマの毎週月曜日の開発会議の風景をメディアでご覧になったことがある方も多いかと思います。プラスチック製品のブロー成形から創業した同社は、今、売り上げの半分以上を家電製品が占め、また、新商品の売上げが商品全体の 6 割を超えています。生産ラインはロボット化され、その制御のためのプログラミングも自社対応。汎用ロボットを自社仕様で改造し、新商品開発から生産までのスピードアップの推進力となっています。



田中秘書室長



角田 I.T.P (INDUSTRIAL TECHNO PARK) 内ショールーム

ピンチはチャンス

創業以来、オイルショックやリーマンショック、新型コロナウイルス感染症と経済的な危機が訪れるたび、自らを変化させることでピンチを乗り越えてきたアイリスオーヤマ。マスクの生産は 2007 年から中国で開始していましたが、新型コロナウイルスの感染流行は、中国から広まったこともあり、2019 年 11~12 月頃にはその徴候を捉え、中国工場でマスクの増産と在庫の積み増しを進めていました。その結果、日本国内でのマスク

供給が滞る中、アイリスオーヤマ製品は比較的タイムリーに供給出来ていたとのこと。翌年2月、経済産業省からマスクの国内生産の打診があり、月曜日だったこともあり、開発会議に即提案。国のマスク補助金^(注1)を活用し国内生産を進めることを決定し、中国工場向けに準備していた生産設備を角田工場に持って来ることで、スタートダッシュを切りました。マスクの供給が世界的に深刻化すると、不織布（メルトブロー、スパムボンド）も不足し、高騰してきたため、国のサプライチェーン補助金^(注2)も活用し、素材も国内生産を行うことで、一貫生産の環境が整います。



マスク工場の様子



角田 I.T.P で生産されているナノエアーマスク

(注1) 経済産業省「マスク等生産設備導入支援事業費補助金」（令和2年度1次補正予算）

(注2) 経済産業省「サプライチェーン対策のための国内投資促進事業費補助金」（令和2年度1次補正予算）

地域からのチャレンジ・発信

日本国内には、コロナ禍ゆえの新しい商品を求める流れが出来つつあります。アイリスオーヤマでは、いち早くサーマルカメラの新商品を販売し、現在は清掃などをAIロボットが行う省人化・非対面ビジネスのロボティクス事業も立ち上げ、ウィズコロナ、アフターコロナを見据えた商品展開が行われています。さらに、前述のサーマルカメラでは、アイリスオーヤマが中心となり、業界団体を立ち上げ基準策定に動き出すなど、地域からの新しいチャレンジや発信がますます注目されています。田中室長は「東北の企業も国や地方自治体とタッグを組んで新しいことにチャレンジし、積極的にアピールしていくべき。我々もチャレンジすることで成長してきた。今後も企業活動を通じて地域の一員として、様々な課題解決に貢献していきたい」と力強く話されていました。

取材を終えて

アイリスオーヤマの商品開発者は、「この製品はいくらで売ることができるか」ではなく「消費者の立場に立って、いくらならこの製品を買うか」という点から考え始めるそうです。価格という厳しい制限枠があるからこそ、その枠の中でありとあらゆるアイデアや意見が飛び交い、開発者をはじめ全ての部門が一丸となって、商品へと収れんしていくことを実感しました。開発者は「社内で試すだけではなく家に持ち帰って使い倒しなさい。そうすることでユーザー目線での開発が可能となる」と言われるそうです。「こんな商品があったらいいな」と消費者が思うことを先取りしてユーザーインで商品開発されていることを知り、生活者にとって、とても頼もしい存在と再認識しました。